

チェロの音色

小桜 陰子

カロディウスという男をご存知だろうか。彼は霧のような、と形容されるチェリストでありチェロ職人である。その業績は、まさに音楽の神に愛されたといっている。しかし彼の遺したチェロはそのほとんどが失われてしまった。また、彼の出自は謎に包まれており、いつどこで死んだのかさえ定かになっていない。今、ここにある一つの奇妙な形をしたチェロだけが彼の生きた証であり、同時に彼の痕跡を消すことになった事件の証人でもある。霧のような男が霧のように消えることになった事件とは、次の通りである。

舞台の幕が上がると、そこには赤茶色に照り輝くチェロと、一人の男が立っていた。猛禽類の顔を模した仮面をつけ、恭しく客席のほうへ礼をする。彼こそが『霧のような』チェロの名手カロディウス。一度彼がその両手を動かせば、聴く者は決して微動だにできない。ゆつたりとした旋律が、人々の全身の血管を広げて背もたれ

と体をびたりと接着させる。やがてリズムが激しくなるにつれ、彼らの心臓は旋律に合わせて鳴り響く。そうして一曲が終わる頃には、聴き手はとてつもない疲労感と共に、今まで味わったことの無い音楽による生理的快感を覚えるのだ。カロディウスは演奏が終わると、そのままアンコールの声も無視して立ち上がる。聴衆たち自身が自らのアンコールを求める大声に酔い始める頃、彼はふわりと消えてしまう。演奏家としての礼儀はいささかなくなってしまったのであるが、これは舞台での一曲のみに全身全霊をかける彼なりのポリシーであるのだ。

演奏会から工房に戻る間まで、彼は決して驚いた仮面を取ることはいらない。そこがまた彼の『霧のような』不気味さを表している。

工房に入り、ドアを閉めたところでようやく彼はその仮面を外す。ここで初めて、なぜ彼が常に仮面を付けているのかがわかる。彼は、音楽の神にのみ愛されたのだ。

「……疲れた」

誰に言うともなく、そのまま彼は隣の寝室へふらふらと歩いていき、そのままベッドへ倒れこんだ。

カロディウスは時々自分が音楽の神に愛されなかったら、という夢を見る。現実の彼とは違って、多くの人の目に晒されることもなく、また仮面をつける必要もなく街の一角で両親と共に生活している。彼には寝ている間でさえ、これが夢であることがわかっていて、それでも、この夢に浸っていたかった。

「おはようございます」

カロディウスが夢の中で母親の作ったスープを口に運ぼうとしていたときに、彼は現実に引き戻された。

「もう朝ですよ。確かに昨日は演奏会があつて疲れているかもしれませんが、仕事しなくちゃダメですよ、カロディウスさん」

声の主はマリアだった。彼女は工房の二階のアパートで暮らしている売れない歌手である。彼女は半年前に引っ越してきたときから、カロディウスの身の回りの世話をするようになった。最初こそカロディウスもその理由を尋ねたのだが、いつもひらりとかわされてしまう。今ではもう、彼はマリアに対して何も言うことはしない。顔を洗い、マリアが作ってくれた朝食を摂った後、カ

ロディウスは工房の作業台に向かう。作りかけのチェロを一つ一つ調べていき、今日の工程をどのように行うかを頭の中で組み立てる。一度彼が作業台に向かえば、予定した工程を終わらせるまで決して工房を出ることは無い。チェロを作る作業は、カロディウスにとって外界との隔絶であり、自らの醜さと向き合わなくても良い時間なのである。

マリアはそんなカロディウスの姿を微笑みながら、そつと出て行くのだった。それが、彼女の日課であった。一つの工程を終えると、カロディウスは膨大な楽譜の中から一つを選び、傍らに置かれたチェロで奏で始める。曲は今まで、子守唄や各地の民謡だった。その音色は親が子供を、というよりは子供が親に構ってもらおうとする声に近かった。しかし最近の彼はそんな一抹の切なさを残す曲ではなく、甘いノクターンを弾くことが多くなっていた。

カロディウスのチェロの音は、通りを音楽で充滿させる。時間としては、おしゃべりの一つが終わるか終わらないかの些細な間だ。しかし演奏会さながらに、人々の

脳を刺激し、その筋肉を硬直させていく。

最後の一小節を弾き終えて、カロディウスは弓を置く。通りに再び普段の静けさが表れる。チェロ工房の醜い男は、作業台に散らばせた楽譜を元通り片付け、再び作業へと移っていく。慣れた手つきは赤ん坊を扱うように優しかった。

彼がチェロを作るのは、最高の音色を奏でたいからに他ならない。工房の中でいくつか売られずに残されたチェロは、カロディウスの過去においては最高のものではあつたが、決して彼の音楽中枢を刺激させるほどの出来ではなかつた。

ふと、彼はマリアとの朝の会話を思い出した。

「カロディウスさんは、どうしてチェロを演奏するのですか？ 噂だと、他の楽器もお上手だって言いますよ」

「……他の楽器は、その……やはり無理なのです。ピアノはとても攻撃的で、ヴァイオリンはあまりにも美しすぎなのです。それに私は……こんな顔で……その、あまり人と話したことが無いから……」

「人と話したことが無いのとチェロがどう結びつくの

でしょうか？」

「私は……チェロで歌うしかないのです。知っていますか？ ヴァイオリンやチェロは、人の歌声に一番近い楽器なのだそうですよ」

「へー……でも、チェロでしか歌えないなんて寂しい事を言わないでくださいよ。カロディウスさんだって素敵な歌を歌えますよ。私とは違って、いつも立派な舞台上に立っているんだもの、仮面を外して歌ってみたらいかがですか？」

「無理、ですよ……舞台に出る人は決してお客さんを失望させてはいけません……」

ふふ、とマリアは笑う。その笑顔を見ているうちに、カロディウスもつられて口の端がゆるくなる。自分に対して『普通に』接してくれる栗毛のマリアは、この霧のようなチェリストにとって、まさしく聖女のような存在であつた。

一人未完成のチェロが横たわる作業台のそばで、カロディウスは淋しくつぶやく。

「歌う、か……。マリアさんの歌う横で、ぼくがチェロ

を弾けたら……それができたらどんなに幸せだろう」

その時、カロディウスは半年後に行われる演奏会について思い出した。演奏会自体の予定は常に入っているのだが、その演奏会は都で行われる最も格式の高いものである。もしこの演奏会の舞台へマリアと共に立つとすれば、マリアは音楽界から認められることになるし、自分はマリアのそばにいられる。互いにマイナス要素はありはしないと、カロディウスは考えた。

この提案をマリアに伝えようと思い、彼は作業を中断した。作りかけのチェロたちが作業台の上で寝転んでいるまま、彼は驚の仮面をつけて外へ出た。

マリアは今日、街外れの空き地で歌の練習をしているはずだ。一刻も早くその姿を見つげようと、カロディウスの足は歩みを速める。迷路のような路地を潜り抜け、家々がまばらになってくる街外れに出るころには、肩で息をしながら走っていた。

いた。空き地ではなかったが、街外れの井戸の近くにマリアは立っていた。マリアさん、と呼びかけようとしたときに、カロディウスは彼女の向かいに誰かがいるの

を見つけた。

「あの人は、仕立て屋の息子さん……でしょうか？」

物置の陰に隠れ、仮面をかぶったままではつきり見えなかったが、そのシルエットは演奏会のたびに利用する仕立て屋の息子であった。

「あーあ、もうありえないじゃない。何がチェロで歌うしかない、よ。気取ってんじゃないわよ、化け物のくせにさ」

カロディウスと接するときとは全く違う口調のマリアがそこにいた。

「何言ってるんだよ、マリア。それを承知であのアパートに住んでるんだろ？」

「そうだけどさ、予想以上に気持ち悪いわ、あんなやつ。朝起きてご飯食べるとすぐにチェロ作り。日光にも当たらないですつと工房の片隅でチェロを作ってるのよ。しばらく経つと、急にチェロを持ち出して弾きだすのよ。確かに音色はとも素晴らしいわ。でも、それだけよ。いっつも歩くときは音もなく忍び寄って、気がつけばあの顔が真後ろなんてのもザラ。おう、嫌だ」

「そんなに嫌なら出て行けばいいじゃないか。俺の家の上にも住まわせてやるぜ?」

「お誘いありがとう。あなたのそばで生活できるなんて素敵よね。でもね、私当分のアパートを離れる気は無いわ」

「なぜだい? どうしてあの化け物のそばで暮らす必要があるんだ?」

「わからない? いくら化け物でも、あいつは世の音楽界から十分認められているの。だからさ、私があいつと関わっていれば、そのうち有名なコンサートなりに一緒に呼ばれるかもしれないの。そこでもし実力を認められたら、私は一気にトップ歌手への道を歩めるわ。無理だったらあいつと結婚でもして、さっさと死なせて莫大な遺産でも相続させてもらっわよ。どう? 完璧でしょ」

「すごいな、何か下心があって近づいてるってのはわかってたけれど、そこまで考えていたとはね」

「ふふふ」

「マリアは笑う。それにつられて仕立て屋の息子も笑う。仮面の奥で、カロディウスの口元も笑った。」

「あは、あはははは、あははは……はっはっはっは……」

カロディウスはその場を離れ、一人工房へと帰っていた。太陽が南に来るまで雲ひとつなく汗ばむ陽気であったのだが、いつしか急に気温が下がり、街はミルク色の霧に包まれた。

マリアが帰ってくるまで、カロディウスは一切音を奏せずにチェロを作っていた。仮面を外し、むき出しになった目玉には、いつも以上にキラリとした光が宿っていた。

「遅くなりました。……あれ? まだチェロを作っていたんですか?」

マリアがけろりとした顔で外から帰ってきたのは、日が完全に暮れた頃だった。若い娘が日が暮れるまで外にいては危ない、昨日までのカロディウスはそう言っていただろう。しかし、今夜の彼はそんな事を言いはしなかった。それどころか、彼はマリアが帰ってきててもその手を休めることは無かった。

「その分だと、夕食はまだ食べてらっしゃらないわね。では、今から作ります。少し時間掛かりますが待っていて」

てくださいね」

少し遅くはなつたが、マリアはいつものように夕食を
作りに台所へ向かう。

「マリアさん、一つ質問してもいいですか？」

「……え？ あ、どうぞ」

「なぜあなたは私に構うのですか？」

「……」

彼女は何も言わなかった。二人の間を沈黙だけが通り
抜ける。残酷な時間がしばし流れた。

「あ……いきなりこんなことを聞いてもすぐに答えら
れるわけではないですよ。いいんですよ、気にしないでく
ださい」

ほつとしたように、マリアは再び台所へ足を運ぶ。カ
ロディウスはようやく作りかけのチェロを作業台に置
き、椅子から立ち上がってその後を追った。

「マリアさん、エドヴァルド記念音楽祭をご存知です
か？」

再びマリアの足がびたりと止まる。

「知っているか、ですって？ もちろんですよ。世界で

も屈指の、名誉ある音楽祭ですもの。私みたいな歌手の
端くれだつて知っています」

「ここに、その音楽祭の招待状があります。どうですか、
出てみませんか？ 私と、という条件付になりますが……

……」

「本当ですか？ ええ、もちろんですとも！」

ふふ、とカロディウスは思わず笑ってしまった。今朝
までなら、マリアの喜ぶ姿を見て自分も喜んでいただけろ
う。しかし今のカロディウスには、彼女に対して侮蔑し
か浮かばなかった。

「私は、音楽に対して……全身全霊をかけています。こ
の音楽祭に出るのも、名誉とかではなく最高の音色を最
高の舞台で奏でたいから。あなたは最高の楽器として私
と舞台に立つてくれないといけないのです……」

「……え？」

振り向いた瞬間、彼女はとても恐ろしい物を見た。音
楽の神にのみ愛された男が今、醜い顔に鬼神を宿してギ
ラリきらめくナイフを振り回していたのだ。

「あは、あははははは……あなたは楽器でないとい

けない、さあ、私に早く楽器としてその美しい歌声を聞かせておくれ…… はははははははははは、すばらしい楽器になってうたっておくれ、あああああああああああああ、はやくそのねいろをきかせるんだ、あっはっはっはっはっはっは」

今宵、工房の窓から霞んで見える月のなんと紅いことか。

半年後、音楽の都に集った人々はカロディウスの演目で素晴らしい音色を聴いた。かつてカロディウスの音楽を聴いた者は、それまで以上の美しさに涙を流し、初めての者はその音色に体全体を支配されていた。彼にとつての究極の音色は完成されたのだ。だが奇妙なことに、その幕はいつまで経っても上がることは無かった。

一度カロディウスが弓を持ち音を奏で始めると、それに合わせてマリアも歌う。マリアの高音がホール中に響き渡る。その旋律は物悲しさを含んだ美しいものだった。それはいにしえの楽曲だった。歴史の中にうずもれ、作者の名前すら削ぎ落とされた、無名の曲の魂の旋律。

「ありがとうございました。カロディウス・グリーシア氏の演奏による作者不詳のレクイエムでした」

曲が終わると、盛大な拍手と共に司会の声が厳かに響く。そして、その時初めて幕は上がったのだ。上がり始めると同時に、アンコールの声が一段と大きくなる。

幕が全て上がり終わると、聴衆はなぜあの美しい曲が『鎮魂歌』という名を付けられていたかを理解した。

霧のような男は、いつもの仮面を被らず満面の笑みを浮かべていた。傍らには、四肢がなくなりチェロになった胴体だけのマリアが、彼によって支えられていた。アンコールの声は静まった。